随想

人生の岐路

愛知淑徳中学校・高等学校体育教諭　津下英子

幼稚園、小学校、中学校、高校と兵庫県姫路市、神戸市で過ごし、大学は東京で過ごし、卒業後はこの愛知県名古屋市に来て40年近く経ちました。

人生には、人それぞれ岐路があります。私にとってはまず大学の選択でした。普通科か、芸術科か、体育科の選択です。私自身は指導者になりたいという希望があり、3年生になって塾に通い、選択した結果、体育科に進むことにしました。どこへという選択の時、母が「指導者となるには東京に行くべきだよ。東京は文化も環境もしっかりと充実しているから」という言葉で、東京の大学に4年間、指導者を目指し、クラブ活動（バスケットボール）を通して学んできました。

そして卒業の際、今度は父から「今まで自分の望み通り勉強してきたのだから、自分が生かされる場を選び、独立独歩で行け」といわれ、可愛い娘に何と厳しい言葉かと悲しくなりましたが、それなりの場を教授に推薦していただきました。男女共学か女子校かと悩みましたが、女子校を選択。創立から文武両道の校風を持つ愛知淑徳学園に勤めることになりました。

不安がありました。グランドに全校生徒が整列すると、グランドの赤土が頭髪の色で真っ黒になるのです。大変なところに来たなという気持ちになり、どうやって自分が培ったことを教え、伝えていけばいいのだろうかと悩みましたが、先輩方が指導する姿を見て、吸収しながら進みました。そして見失っていた自分の教育理念と信念を引き出すことができたのです。「教育とは教え育てること、まずは人間教育だ」と、今までの自分の学んできたこと、培ってきたことを生徒たちに教え伝えることだと。大きな自分の岐路でもありました。

それからは自分の「教育理念と信念」でもって生徒に接してきました。時には窓から「鬼が来るぞ」と言われ、廊下を歩いていると知らぬ間に生徒はいなくなり、教室に入ってしまう。それを追いかけて善悪の分別を指導する。私がいなくなると、生徒はスカートの丈、ネクタイ、靴下を直し、時には走り去ってしまう。でも嫌な思いはしませんでした。それが私の「教育理念と信念」でしたから。クラス担任になると、「津下の担任は嫌だ」と泣き出す生徒もいましたが、最後には「先生のクラスでよかった」と言われ、私が泣きたい思いがしました。

クラブ活動はバスケットボール部の顧問として、今も指導しています。卒業生は1000人近く送り出していると思います。愛知淑徳高校で一番厳しく、怖いクラブではないかと思います。生活面、精神面、技術面と、自分の持っているものを伝えています。苦しいこと、悔しいこと、辛いこと、悲しいこと、そして楽しいこと、嬉しいことを共有し、やる時にはやる、やるからには集中して力以上のものを出してやる。今では死語となっている「根性」をしっかりと教えてきました。良い時もあまりほめることはなく、厳しい声をかけることが多いのですが、そんな指導の中、チームプレイの素晴らしさ、お互いの協力の大切さ、厳しさの中での優しさ、自然体の大切さ、先輩を尊敬し、後輩を思いやり、周りへの気配りの大切さを教えてきました。これが何十年先になって役立つものと確信を持って教えてきました。今は卒業生から、「優しくなりましたね」と言われ、お叱りを受けます。しかし気持ちは変わらず、指導しているつもりです。

人生の岐路である結婚も自分にとっては大きな選択でしたが、性格上きっと家庭にのめりこむと思ったので（もちろん、結婚の話はありましたからね）、生徒と向かい合うことを選択しました。少しも後悔していません。たくさんの子供たち（いや、孫かな）と接することに充実感を得てきます。「先生、まだ今からでも十分結婚できるよ」と優しい言葉をかけてくれます（涙）。

指導ができるのもあと少しですが、これからも私の教育理念・信念である「人間教育」を貫いて頑張っていきたい。そして継続は力であり、努力には限界はないことを感じていきたいと思っています。そして次にくる岐路をどう選択するか、楽しみたいと思っています。